

ノストラダムス『予言集』に登場する地名の特色について

鈴木 大輔[†]

ノストラダムスの『予言集』には、様々な地名が登場する。しかし、それを整理・分類した研究はあまりない。本稿では、1555年の初版に登場した詩篇（第1巻1番～第4巻53番）、1557年版で増補された詩篇（第4巻54番～第7巻42番）、1568年版で増補された詩篇（第8巻1番～第10巻100番）に分け、それぞれで登場する地名を集計し、分析した。その結果、フランス国内については、どの地域圏の地名も満遍なく登場しているが、とりわけオクシタニー地域圏の地名が突出して多く、第8巻以降でそれが顕著なことが分かった。これはおそらくオスマン帝国による侵攻を警戒したものだろう。フランス以外の地名の中では、当時のヴェネツィア共和国に属する地名や、中央ヨーロッパの地名が増えているのも、そのことと関係があるものと思われる。また、第8巻以降では変則的な綴りのために、論者によって読み方の分かれる地名が増えている。この事実は、第8巻以降が読みづらい草稿のまま、ノストラダムスの生前には刊行されなかったことを疑わせる。その場合、第二序文の奥付にある「1558年6月27日」は何者かによる改竄で、本来は「1559年6月27日」と書かれていたのではないだろうか。そのように考えると、第8巻以降はカトー＝カンブレジ条約の後にまとめられたものとなり、その頃の国際情勢も、地名の出現率に影響していると考えられる。

An Examination of the Distribution of Toponyms in the *Prophéties* of Nostradamus

Daisuke Suzuki

The *Prophéties* of Nostradamus contain a number of references to various toponyms. However, there is a dearth of studies that have organized and classified these references. In this paper, we have divided the toponyms appearing in the 1555 edition (Centurie I-1 to IV-53), the 1557 edition (IV-54 to VII-42), and the 1568 edition (VIII-1 to X-100), and we have analyzed the resulting data. Consequently, the distribution of toponyms in the *Prophéties* is relatively uniform across all regions of France. It is noteworthy that the toponyms in the Occitanie region are particularly prevalent, especially in Centuries VIII-X. This is likely attributable to concerns about the potential invasion of the Ottoman Empire. Furthermore, the number of toponyms with irregular spellings has increased in Centuries VIII-X. This leads to the assumption that Centuries VIII-X were never published and remained in draft form during his lifetime. In light of these considerations, we posit that the date "June 27, 1558" in the colophon of the second epistle was altered from the original "June 27, 1559" by an unidentified individual. Consequently, we postulate that Centuries VIII-X were compiled subsequent to the Treaty of Cateau-Cambrésis, and that such international events also influenced the frequency of toponyms.

1. はじめに

16世紀の人文主義者ノストラダムスの主著の一つである『ミシェル・ノストラダムス師の予言集』（以下、『予言集』）には、数多くの地名が登場する。日本で広く知られたいわゆる「恐怖の大王」の詩にも、地名が含まれている。にもかかわらず、どのような地名がどのくらいの頻度で登場するのかについては、ほとんど掘り下げられてこなかった。本稿では、『予言集』における地名を整理・分類し、詩篇が発表された時期ごとに地名の出現傾向に変化が

あるのかどうか、そこから何が分かるのかを考察する。

2. 本稿における分析の範囲

2.1 先行研究

『予言集』における地名については、いくつかの先行研究がある。とりわけ、ノストラダムスの主要な参照元の一つが、シャルル・エチエンヌの『フランス街道案内』（1552年）にあったことを明らかにしたシャンタル・リアルトの研究は特筆に値する（Liaroutzos 1986）。また、

[†] 博士後期課程在籍中（人文学プログラム）

後述するように、ピエール・ブランダムールやアンナ・カールステットによる指摘もある。

その一方、地名そのものの整理・分類の試みは、あまりなされてこなかった。エドガー・レオニの大著では、索引の一つとして、国・地域別に事件を整理した索引があり、登場する地名も列挙されている (Leoni 1961:538-546)。それらは有益ではあるものの、出現箇所の提示は国単位 (または東欧など、国より広い単位) で、都市・地域名ごとの出現箇所・回数も、フランス国内の地域的な偏りの有無なども分からない。

ロベール・ブナズラは、1980年代に刊行されていた『ミシェル・ノストラダムス研究誌』にて、地名の一覧を提供した (Benazra 1986)。これは、細かな都市・地域名ごとに、どの詩篇に登場するのかをまとめたものであり、レオニとは異なる有益性を備えているものの、まだICTの活用が限定的だった時代ということもあってか、脱漏も少なくない。また、レオニの著書では『予言集』のテキストも提供されているため、自身のテキストを基準にした索引だろうと推測できるが、ブナズラは底本を示していない。

だが、地名を検討する上では、底本と採録基準の明示は避けて通れない。例えば、『予言集』第1巻11番の « Naples, Leon, Secille, » のLeonは、1568年版の異本にはLyonと綴るものが現れ、以降の多くの版で採用されてしまっている。反面、ブランダムールの校訂版では、Leon. と校訂され、シチリアのレオンティーニ (現レンティーニ) と読まれている (Brind'Amour 1996:63)。レオン (西・仏)、リヨン (仏)、レンティーニ (伊) では場所が全く異なり、国別に集計する場合でも結果に影響する。また、正書法が未確立だった時期の作品のため、同じ地名でも表記の揺れが多く、ブナズラの一覧に見られた脱漏は、おそらくそれも一因であろうと思われる¹⁾。

2.2 本稿の基準

そこで本稿では、極力、初出を尊重する観点から、第1巻1番～第4巻53番は初版 (1555V)、第4巻54番～第7巻42

番は生前の増補版 (1557U)、第8巻～第10巻は現存最古の完全版 (1568X) を底本とし、読みが分かれる地名は、比較的信頼できると思われる主要な論者²⁾の見解が概ね一致しているものはそれを採り、読みが統一されていないものは「不明」に分類した³⁾。

また、紙幅の都合から、分類した元データの全体を示すことはできないが、本稿ではむしろ整理・分類した結果からどのようなことが言えるのかに重点を置く。というのは、前述したレオニやブナズラの研究では、整理・分類にとどまっていて、分析はなされていなかったからである。反面、ブランダムールらの指摘では、土台となる統計的なデータは示されていなかった。本稿の研究では、それぞれの先行研究の不足を埋めつつ、『予言集』における地名の理解を深めることを企図している。

なお、国・地域別の分類では、2024年現在の国境・行政区画を基準にしている。というのは、『予言集』には非常に細かな地名も多く、変更が多かった16世紀当時の境界線を使おうとすると、不都合が生じるためである⁴⁾。

3. 地名の整理

3.1 対象範囲の概観

登場する地名を現在の国境などに基づいて分類したものが表1である。フランスが突出して多い反面、ヨーロッパのかなりの範囲と、地中海に面するアジア、アフリカ地域に跨っていることが分かる。

『予言集』第二序文には、「その [予言詩の] 大部分は天文学的算定に一致するよう組み立てられ、欧州全土の国々、地方、大部分の都市の年月、そして週に対応しています。そこには、[...] 諸地方の変化のせいで、アフリカや一部のアジアも含まれています」(第8節)⁵⁾とある。

「アフリカ」は、チュニス、アルジェなど、地中海世界を構成する北アフリカにほぼ限定されている⁶⁾。

「アジア」は小アジアをはじめとして、西アジアにほぼ限定されている。例外はガンジス川とインダス川が登場す

¹⁾ 例えば、第3巻82番のFreinsがFreius [Fréjus] の誤りであることにほぼ異論はないが、ブナズラはフレジュスについて、Freiusと綴られている第10巻23番しか挙げていない。また、第9巻26番のPlombinはPiombinoの表記揺れであることが確認されている (Plombinはノストラダムスより先に、ラブレールが『第四の書』第25章で使用しており、渡辺一夫訳、宮下志朗訳のいずれも「ピオンビノ」ないし「ピオンビーノ」と表記している)。だが、ブナズラの一覧にピオンビーノはない。

²⁾ 1555V、1557Uの特色は鈴木 2023aを参照。1568Xは1568年版の異本のひとつだが、その特色などを説明した別の拙稿を準備中である (古版本の略号は、鈴木 2023a、鈴木 2024を参照のこと)。また、ここでの「主要な論者」は高田・伊藤 1999、Leoni 1961、Brind'Amour 1996、Petey-Girard 2003、Clébert 2003、Lemesurier 2003、Lemesurier 2010、Sieburth 2012を指す。

³⁾ 『予言集』では「獅子」も「リヨン」もLyonと綴られているため、都市リヨンの出現頻度は文脈から判断せねばならないし、似た例は他にもある。また、主要な論者での「概ね一致」の判断にも主観が混じることは避けられないが、主観は極力抑制した。例えば、第9巻45番に出てくる « Tyrren » は、過去の拙稿 (鈴木 2023b:13) ではPyrensの誤記ではないかと提案し、その見解に変化はないものの、前述の諸文献で見解が分かれていることから、「不明」に分類した。また、表1における「地域特定困難」とは、同じ地名がフランス各地にあり、なおかつ文脈からどの地域圏の地名かを特定できないものを指す。

⁴⁾ 現在の複数国に跨る歴史地名は便宜的に特定の国・地域にまとめた場合がある。例えば、ナヴァルはスペインのナバラ州、フランドルはベネルクスの地名に分類している。逆に、ローヌ川、アルプス、ピレネーはフランスの地名として数えている。

⁵⁾ 1568Xを基にした拙訳。節番号はバレスト式による。

⁶⁾ ブランダムールは第二序文に登場する異文Ardaをベナンの都市と見なした (Brind'Amour 1993:253)。だが、Ardaとする異文に正当性はない (鈴木 2023b:3-5)。ゆえに、この異文に基づいて、描かれている範囲を西アフリカにまで拡張することは、我々としては支持できない。

ノストラダムス『予言集』に登場する地名の特色について

表1 地名・民族名を国別に分類した出現頻度

	I-1～IV-53 (1555V)		IV-54～VII-42 (1557U)		VIII-1～X-100 (1568X)	
	回数	出現率	回数	出現率	回数	出現率
フランス	212	38.20%	152	29.17%	255	43.81%
イル＝ド＝フランス	4	0.72%	3	0.58%	12	2.06%
オー＝ド＝フランス	1	0.18%	3	0.58%	12	2.06%
オーヴェルニュ＝ローヌ＝アルプ	15	2.70%	4	0.77%	28	4.81%
オクシタニー	30	5.41%	26	4.99%	59	10.14%
グラン・テスト	9	1.62%	7	1.34%	10	1.72%
コルス	2	0.36%	1	0.19%	0	0.00%
サントル＝ヴァル＝ド＝ロワール	11	1.98%	5	0.96%	18	3.09%
ヌーヴェル＝アキテーヌ	22	3.96%	19	3.65%	22	3.78%
ノルマンディー	3	0.54%	10	1.92%	5	0.86%
ブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ	15	2.70%	8	1.54%	7	1.20%
ブルターニュ	1	0.18%	2	0.38%	8	1.37%
プロヴァンス＝アルプ＝コート＝ダジュール	29	5.23%	16	3.07%	28	4.81%
ペイ＝ド＝ラ＝ロワール	5	0.90%	4	0.77%	8	1.37%
山脈・河川・湖などの自然地形	28	5.04%	24	4.61%	23	3.95%
「フランス」「ガリア」および地域特定困難	37	6.67%	20	3.84%	15	2.58%
モナコ	3	0.54%	2	0.38%	4	0.69%
イタリア・バチカン	120	21.62%	133	25.53%	112	19.24%
スペイン・ポルトガル・ジブラルタル	33	5.95%	25	4.80%	34	5.84%
ベルギー・オランダ・ルクセンブルク	12	2.16%	13	2.50%	11	1.89%
イングランド・スコットランド・ウェールズ	15	2.70%	16	3.07%	16	2.75%
スイス	10	1.80%	8	1.54%	7	1.20%
ドイツ	14	2.52%	24	4.61%	10	1.72%
オーストリア	3	0.54%	1	0.19%	1	0.17%
デンマーク	1	0.18%	1	0.19%	2	0.34%
ギリシャ	19	3.42%	16	3.07%	15	2.58%
マルタ	2	0.36%	2	0.38%	4	0.69%
チェコ・スロバキア・ポーランド	0	0.00%	4	0.77%	1	0.17%
ハンガリー	2	0.36%	4	0.77%	9	1.55%
クロアチア	3	0.54%	1	0.19%	10	1.72%
ルーマニア	0	0.00%	4	0.77%	1	0.17%
アルメニア	1	0.18%	3	0.58%	0	0.00%
欧州のほかの地名	41	7.39%	39	7.49%	15	2.58%
トルコ	13	2.34%	18	3.45%	10	1.72%
キプロス	1	0.18%	1	0.19%	0	0.00%
イラン（イラン領内を含む歴史地名）	11	1.98%	3	0.58%	2	0.34%
「アラブ」およびアジアのほかの地名	16	2.88%	14	2.69%	8	1.37%
「バルバロイ」	5	0.90%	7	1.34%	10	1.71%
アフリカ	9	1.62%	16	3.07%	6	1.03%
「アメリカ」？	0	0.00%	0	0.00%	1	0.17%
不明	7	1.26%	12	2.30%	39	6.70%

る第2巻60番だが、これは当時流布していたシビュラ予言に触発されたことが確実視されており、ガンジス川やインダス川に具体的な思い入れがあったとは思えない⁷⁾。

他方、1回だけだが、「アメリカ」への直接的な言及がある。「Le chef de Londres par regne lamerich, / L'isle d'Esosse tempiera par gellee: [...]」(第10巻66番)である。このlamerichは1568X以外の1568年版ではl'Americhと綴られており、アメリカ(Amélique)の綴りの揺れと理解するのが通説だった。アメリカという呼称は1507年にヴァルトゼーミュラーによって提案され、その名称は1538年のメルカトルの地図でも南北アメリカ大陸に適用されていたので(織田 2018:112-113)、ノストラダムスが使っていたとしてもおかしくはない。だが、17世紀の注釈者バルタザール・ギノーは、Lymerich、つまりアイルランドの都市リムリック(Limerick)の表記揺れと解釈していた(Guynaud 1693: 386-387)。ギノーの読み方には支持できないものの方が多く、この解釈も忘れ去られていたが、ロンドンやスコットランドと共に登場している点も踏まえれば、少なくともこの単語の解釈については相応に説得力があるように思われる⁸⁾。

また、諸説あって定説のない「バビロンの反対側」(第1巻55番)について、ブランダムールはブラジルの可能性を提起していた(Brind'Amour 1996:127)。16世紀半ばのフランスでは、ブラジル木の輸入先としてブラジルは強い関心を集めていたので(二宮 1987:646-654)、あり得ないとまでは言えないものの、ブランダムール自身も指摘していた通り、他の個所ではブラジルへの直接的言及は見られない。

この詩の他にも、いくつかの詩篇を南北アメリカ大陸と結び付ける説はあるものの、いずれも固有名詞のない詩篇を解釈した結果である。今のところ、ノストラダムスがアメリカ大陸を重視していたとは見なしがたい。

『予言集』第二部(第二序文、第8巻～第10巻)には偽作説もあるが、少なくとも先に見た第二序文での予言の範囲指定は、表1とほぼ矛盾しないものと見てよいだろう。

3.2 フランスの地名の集中と分散

表1のうち、フランス国内の都市名・地域名を地域圏ごとに集計し、登場回数を地図上に書き込んだものが図1である(数字は登場回数、括弧内の数字は順に第1巻1番～第4巻53番、第4巻54番～第7巻42番、第8巻1番～第10巻100番の登場回数を示す)。

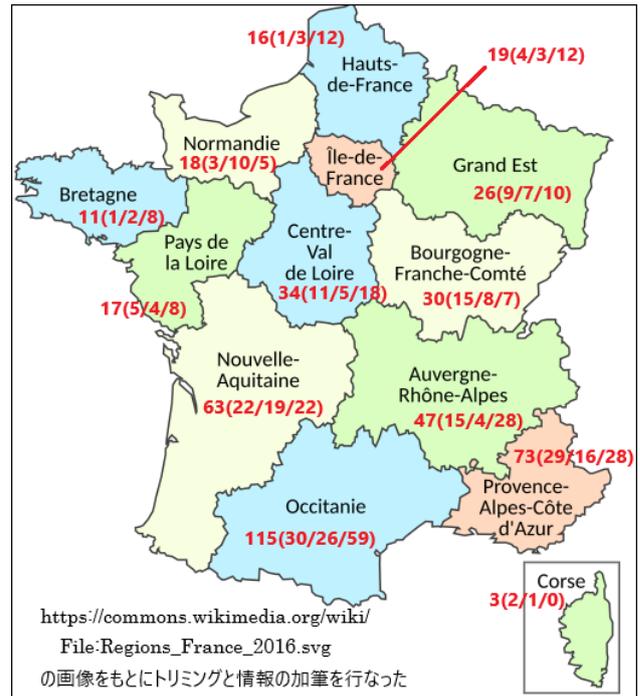


図1 フランス国内の都市・地域名の登場頻度

それを見ると、どの地域圏の地名も満遍なく登場していることが分かる⁹⁾。他方、表2は、地名・民族名を示す単語を多い順に上位30位前後まで並べたものである¹⁰⁾。そちらを見ると、フランスの地名はほとんど入っていない。つまり、フランス地名の多さは、特定の都市が頻出するのではなく、どの地域圏も多くの地名が1回ないし数回ずつ登場した結果であることが読み取れる。

こうした地名のちりばめ方は、同時代の占星術師ローラン・ヴィデルからは批判されていた。ヴィデルに言わせれば、ノストラダムスが任意の都市についての的中させたと言われるのは、「フランスのあらゆる都市」に対して不幸を予言したから、つまりは下手な鉄砲も数撃てば当たるとばかりに手当たり次第に都市名を挙げたからだという。むしろヴィデルの見解を引用したブランダムールが示したように、フランスのどの地域の人にも関心を持ってもらおうとした結果と見る方が適切だろう(Brind'Amour 1996:XLVII)。毎年刊行していた『暦』の場合、来年起きる予言として世間の耳目を集めることができるが、時期が不明瞭な描写の多い『予言集』の場合、読者が身近に感じられる地名を出す

⁷⁾ 原語は« Gang. Iud. »で、インダス川はIudをIndと校訂することで導かれる読みだが、同じ行にテージョ川も挙げられており、シビュラの予言にもその3河川が挙がっていることから、妥当な読みだろう(Brind'Amour 1996でも指摘されているように、ノストラダムスは訳書『ガレノスの釈義』の序文でその予言を引用している)。当該のシビュラ予言については、スブラフマニヤム 2002を参照。

⁸⁾ tempieraの読み方に諸説あるため、当該詩句の訳を確定させ難いが、例えば「ロンドンの頭目は統治[の苛酷さ?]によってリムリックを、酷寒によってスコットランドの島を[それぞれ]試すだろう[...]」等と訳しうる。

⁹⁾ コルス(コルシカ島)の登場回数は少なめである。コルスは長らくジェノヴァ領で、1553年にフランスが占領したものの、1559年に手放した。ノストラダムスは『予言集』初版(1555年)で「ガリアの艦隊よ、コルシカには近づくな、[...]汝は悔いるだろう」(第3巻87番)と警告しており、コルスに対し、フランス領としての執着や関心をどの程度持っていたのかは定かではない。

¹⁰⁾ 名詞形と形容詞形はひとまとめにした。フランスとガリアは同一視してもよいのだろうが、念のため分けた。

表2 地名・民族名を示す単語の出現頻度

総計 (I-1~X-100)	I-1~IV-53	IV-54~VII-42	VIII-1~X-100
ガリア	ガリア 21回	ローマ 19回	ローマ 13回
ローマ	イスパニア 14回	ガリア 11回	バルバロイ 10回
フランス	フランス 13回	ケルト 10回	ガリア 9回
イスパニア	ローマ 9回	イスパニア 8回	イングランド 8回
バルバロイ	ケルト 7回	アラブ	ヴェネツィア
イングランド	ゲルマニア	ビザンチン	トゥールーズ
ローヌ川	アドリア	ジェノヴァ	リヨン
ケルト	ローヌ川 6回	フィレンツェ	イスパニア 6回
ビザンチン	ベルシア	バルバロイ 7回	ビザンチン
ゲルマニア	ポー川	イタリア	フランス
アラブ	バルバロイ 5回	イングランド	ローヌ川
イタリア	イタリア	フランス 6回	ミラノ 5回
ジェノヴァ	リヨン	ローヌ川	ナルボンヌ
フィレンツェ	ナルボンヌ	ライン川	フォワ
ヴェネツィア	シチリア	ミラノ	エマティア
リヨン	ヘスベリア	ゲルマニア 5回	フィレンツェ 4回
ナルボンヌ	ロンドン	ピレネー	ゲルマニア
ミラノ	ボルドー	レマン湖	パンノニア
シチリア	イングランド 4回	バルセロナ	シチリア
トゥールーズ	トリノ	ブリタニア	プロワ
トリノ	ピレネー	アルプス	モナコ
バルセロナ	ガロンヌ川	アルパ	マルタ
ピレネー	フランドル	アフリカ	ヨーロッパ
ブリタニア	ラングル	バルマ	ブルターニュ
ヘスベリア	リグーリア	トリノ 4回	ベルビニヤン
ベルシア	ナポリ	ラングル	モゾル
ロンドン	マルセイユ	ルーアン	
アドリア	アウソニア	ロドス	
ガロンヌ川	インスブリア	フェッラーラ	
プロワ	フェニキア	ケルン	
モナコ	ランス		
	カンパニア		

ことで、臨場感を持って読んでもらおうとしたのではないだろうか。

また、カールステットは『予言集』に遠方の地名が含まれることと対比し、読者にとって身近な地名を出すことによる親近感と、見慣れぬ地名を出すことによる異国趣味との組み合わせが企図されているとした (Carlstedt 2005:149)。

異国趣味は後述するとして、まず、フランス国内の地名について、時期による変化を指摘しておきたい。

表1・図1を見れば明らかなように、生前の版 (1555V, 1557U) に比べ、1568Xでの出現回数が激増している地域圏が複数ある。そのいくつかは、前述の親近感を持たせるために、言及の少なかった地域の地名を増やして、バランスを取ろうとした可能性も考えられる。『フランス街道案内』の影響を指摘されている詩篇がほぼ第8巻以降に集中しているのは、自身にとっても馴染みのなかった地名を、街道

案内書を基に取り込もうとしたからではないだろうか¹¹⁾。

一方、それだけでは説明がつかないのがオクシタニー (Occitanie) である。第7巻まででも、オクシタニーは他の地域圏よりも突出していたにもかかわらず、第8巻以降でさらに激増しているからである。ノストラダムスはオクシタニーの主要都市、トゥールーズ、カルカソンヌ、ナルボンヌなどでは10代後半から20代にかけて滞在したことがあり、モンペリエ大学に在籍していたこともあった。ゆえに、馴染みのある地域だったのは事実だが、なぜ第8巻以降で激増したのだろうか。

この点で興味深いのが、第9巻6番である。1568Xから引用し、拙訳を付けておく。

第9巻6番

Par la Guyenne infinité d'Anglois

Occuperont par nom d'Anglaquitaine

Du Languedoc Ispalme Bourdeloys.

Qu'ilz nommeront apres Batboxitaine.¹²⁾

無数のイングランド人がギューイエンヌを
イングランドのアキテーヌの名で占領
するだろう。

ラングドック、ラ・パルムからボルド

レー [までを]
彼らは後にバルバロイのオクシタニーと呼ぶだろう。

この詩はほぼ読んだままで、ギューイエンヌ周辺をイングランド人が占領する頃、ラングドック周辺はバルバロイが占領することになる、という内容である¹³⁾。『予言集』におけるバルバロイは通常、「エジプト西部から大西洋岸に到るアフリカ北部地域に居住するバーバリー人ないしイスラム教徒を指すらしい」(高田・伊藤 1999:259)。そして、おそらく地中海沿岸部を荒らす場面の描写では、オスマン帝国に帰順したバルバリア海賊が意識されているのだろう¹⁴⁾。

フランスはフランソワ一世 (在位1515~1547年) の代からオスマン帝国と同盟関係にあり、アンリ二世 (在位1547~1559年) の代でも継続していたが、ノストラダムスはそのことに強い懸念を抱いていた。「ガリア人の不和

¹¹⁾この点は、ノストラダムスがどのように詩を書いたのかという問題にも結びつく。第二序文では「詩の規律よりはむしろ詩的狂熱に伴われた生来の天賦によって」書き上げた主張していた (第7節)。その一方、近年ではノストラダムスを書物古い (書物を無作為に開き、そのページに出てくる語句で占う) の実践者と位置付ける見解も出されている (Lemesurier 2010; Huchon 2021:Ch. X)。

¹²⁾IspalmeはLapalme [La Palme]の誤記とする説に従った。バトボクシテーヌBatboxitaineは他の版ではバルボクシテーヌBarboxitaineとなっており、そちらを採った。

¹³⁾合成語の時にbarbareをbarb-と略すのは少々不自然なようだが、第8巻9番の« Barb' »という省略形はBarbareの略と見なすことが通例である (この詩は後述)。

¹⁴⁾当該期のバルバリア海賊については、レーン・プール 1981の第1部、桃井 2017の第3章等を参照のこと。

と怠慢のせいで、ノムハンマドに道が開かれるだろう […]」(第1巻18番)という詩句などに、それはよく表れている。

オスマン帝国の艦隊は、神聖ローマ帝国寄りだった都市ニースの攻略に際し、1543年から1544年にかけてトゥーロンとマルセイユで越冬した。ノストラダムスがマルセイユに住み、医師ルイ・セールに師事していたのは1544年のこととされる(Lemesurier 2010:51)。また、1545年8月26日にマルセイユで書かれたノストラダムス自筆の診断書から、少なくともその時点でマルセイユにいたことが分かっている¹⁵⁾。つまり、ノストラダムスはオスマン帝国の艦隊で港が埋め尽くされるさまを直接見たか、目撃した人々からごく近い時期に聞いたかをしたはずである。ノストラダムスのムスリムに対する否定的な感情は、中世以来の予言書¹⁶⁾の影響だけでなく、こうした体験も影響していたものと思われる。

さて、第9巻6番ではアキテーヌにも言及されていた。こちらはどうかだろうか。アキテーヌはかつてイングランド領だったが、百年戦争を経てフランス領となっていた。だが、ノストラダムスはイングランドによるアキテーヌへの介入を警戒していたらしい。反塩税一揆(1548年)をモデルにしたとされる第2巻1番前半では「アキテーヌの方では、ブリタニアの攻撃により、ノそして彼ら自身により、大々的な侵攻があるだろう」と、イングランドの介入を危惧していた。実際にイングランドが介入することはなかったものの、反塩税一揆当時、それを警戒する風説があったという(Brind'Amour 1996:194-196)。ノストラダムスは『予言集』初版以来、ずっとイングランドの介入を危惧していたということだろう。その観点で図1を見返すと、オー＝ド＝フランス(Hauts-de-France)の急増も興味深い。

1558年1月にはフランスが、オー＝ド＝フランスの港町カレーを、イングランドから奪還している。また、サン＝カンタンは1557年の大敗でスペインに占領されたが、1559年4月のカトー＝カンブレジ条約で取り戻した。そして、『予言集』において、カレーは第7巻までに1度も登場しないが、第8巻以降では2回登場する。第9巻28番の「[サン＝]カンタンとバレーは奪還されるだろう」のバレー(Balez)がカレー(Calez [Calais])の誤記なら、これを入

れて3回になる。また、地名としてのサン＝カンタンはこの第9巻28番も含めて3回登場するが、これも全て第8巻以降にしか出てこない。ノストラダムスがそれらの都市の奪還に関心を示したから、言及が増えたと考えるのが自然だが、彼の場合、そうした攻勢がむしろ他国を刺激し、特にイングランドが今度こそアキテーヌ侵略に乗り出すと警戒したのではないだろうか。

『予言集』第8巻以降については、それが本物なのかどうかや、最初に刊行されたのはいつなのかといった問題が決着していない。ただ、少なくともここで見てきた点からは、1558年～1559年頃に書かれた素材が含まれていると考えられる。

3.3 フランス以外の地名の傾向

次にフランス以外の地名についてみておこう。表1・2を踏まえると、イタリアの多さが突出している。中でもローマが多いものの、「ローマ人」はイタリア人の提喩として用いられている可能性が高いので、都市ローマのみに関心が集中していたというわけではないのだろう¹⁷⁾。

他方、イタリアの地名は、第8巻以降では出現率が下がる。これはカトー＝カンブレジ条約でイタリア戦争が終了したこと、無関係ではないと思われる。

他方、第8巻以降で顕著に増大しているのが、ハンガリーとクロアチアの地名である。後者の沿岸部は当時ヴェネツィア共和国の一部だったので、実質的にヴェネツィアへの関心の高まりと言えよう。実際、表2を見れば、第8巻以降では「ヴェネツィア」も急増していることが分かる。当時のヴェネツィアは海軍力で知られた共和国だが、それへの注目度の上昇は、ハンガリーへの注目度の上昇と密接に結びついていると思われる。クロアチア北東部やハンガリーは当時オスマン帝国領になっており、つまりは先に第9巻6番で見たように、ムスリムの勢力拡大への警戒心によるものと考えられるからである¹⁸⁾。

そして、第7巻まででのハンガリー、クロアチアへの言及で用いられる単語は「ハンガリー」「パンノニア」「ダルマチア」「スラヴォニア」の4種だけだったが、第8巻以降ではそれら以外に「イリュリア」「ザーラ [ザダル]」「サローネ [ソリン]」「スカルバンティア [シヨブロン]」「ブ

¹⁵⁾ 高熱で死の危険もある3人の囚人を診察し、早急な治療を勧告する内容で、エクス的高等法院はこの勧告に従って、病院への移送を決めた(Archives départementales des Bouches-du-Rhône, Archives. Trésors et richesses des Archives départementales des Bouches-du-Rhône, [Avignon, L'Imprimerie Laffont,] 1996, p. 29)。

¹⁶⁾ ノストラダムスの重要な参考文献となっていた予言アンソロジー『ミラビリス・リベル』(1522年)には、中世の予言書「メトディウス予言書」が採録されていた。この予言書は、7世紀シリアのキリスト教徒たちが、イスラーム勢力の拡大に悩まされる中で、聖メトディウスの名で偽作したと考えられており、同書に含まれる予言には反イスラーム色が非常に強い。メトディウス予言書については、宮本1989やGarstad 2012などを参照のこと。

¹⁷⁾ 『予言集』にはフランス人(françois)やガリア人(gaulois)が頻出する一方、イタリア人(italien)は1回も登場しない。

¹⁸⁾ 16世紀末まで「ヨーロッパ人はアラブ人、サラセン人、トルコ人の間に区別を知らない」(宮本 1989:25)。ノストラダムスは北アフリカのモール人(ムーア人)についても、『1565年向けの暦』において「モール人の、すなわちムハンマドの宗派」(la secte Morisque, ou Mahumetique)と表現していた(Brind'Amour 1996: 458)。『予言集』においては、アラブ人、バルバロイ、モール人、トルコ人などは、多少の意味合いの違いはあったとしても、いずれもムスリムを指していると思われる。

ダ」「フラナティクス湾 [クヴァルネル湾]」「プーラ」「ラ
グーザ [ドゥプロヴニク]」と、具体的な地名が急増して
いる（〔 〕内は別名ないし現在名）。これは、それだけこ
れらの地域への具体的な関心が高まった結果と思われる¹⁹⁾。

つまり、ノストラダムスにとって、イタリア戦争の終結
後に真っ先に注目すべきは、オスマン帝国の動向だったこ
とになる。1562年にユグノー戦争が始まってからは、当然
フランス国内への関心（およびプロテスタントへの支援を
大義名分とするイングランド介入への警戒）が高まると思
われるので、第8巻以降（の、少なくとも相応の部分）が
1562年以前に書かれていたことを裏付ける様に思われる。

3.4 「不明」の地名などから導かれる仮説

表1でもうひとつ顕著なのは、第8巻以降での「不明」の
地名の多さである。そのすべてが全く見当がつかないとい
うわけでないにせよ、定説が確立されていない地名が多い
のは、それだけ綴りが変則的であることを示している。

綴りが変則的な理由としては、予言の範囲拡張の結果、
ノストラダムス自身にとっても馴染みのない地名が増えた
ため、不正確になった可能性が想定できる。また、未完成
の草稿であれば、細かな表記まで調整しきれなかったとし
ても不思議はないので、第二部は、ノストラダムスの存命
中には公刊されなかった可能性も考えられる。

第二部が1558年に刊行されたのか、草稿のままだったの
かは議論が分かれているものの、ミレイユ・ユションが指
摘するように（Huchon 2021:265）、異なる詩で同じ行が使
い回されているなどの不自然な点は、以前から知られてい
る。ユションは具体的にその詩番号を挙げていなかったが、
第8巻38番と第8巻52番のことだろう。この2つの詩篇
は1行目が全く同じ上に、後者の4行目は「*Deuant Boni.*」
と2語で打ち切られる不自然な構成になっている²⁰⁾。

『予言集』では、1行丸ごと同じ詩句を複数の四行詩で
使い回した例は他になく、特に4行目が未完成の第8巻52
番は試作だったことが強く疑われる。

第二部が未完成の草稿のままに放置されたのだとすれ
ば、それはなぜだろうか。アンリ二世にあてた献呈文の形
をとっていた第二序文の日付が「1558年6月27日」で、そ
の約1年後にアンリ二世が横死したために不謹慎と解釈さ
れた、としばしば言われている。かつては、1558年版が出
されたものの、翌年のアンリ二世の横死を踏まえて全て破
棄されたという極端な仮説すらあった（Randi 1990:19）。

さて、地名を比較してきた結果から、我々は第二序文の

元々の日付が「1559年6月27日」で、後に何者かが1年早
める形で改竄したのではないかと、という仮説を提案する。

ノストラダムスはカトー＝カンブレジ条約によってイタ
リア戦争が終結したことを踏まえ、キリスト教国が手を結
んでオスマン帝国に対抗する用意が整った、と考えたので
はないだろうか。実際、第8巻9番はそれを描いているよう
に読み取れる。

第8巻9番

Pendant que l'aigle & le coq à Saoune

Seront vnis Mer Leuant & Ongrie,

Larmee à Naples, Palerne, Marque dancone.

Rome, Venise par Barb' horrible crie.²¹⁾

鷲と雄鶏とがサヴォーナで、

レヴァントの海とハンガリー [に関し]、同盟する間、
バルバロイの恐るべき叫びのせいで、軍隊がナポリ、
パレルモ、アンコーナ辺境、ローマ、ヴェネツィアに。

鷲はハプスブルク家の紋章、雄鶏はフランスの象徴であ
る。カトー＝カンブレジ条約と同時に、アンリ二世の娘エ
リザベートと、ハプスブルク家のスペイン王フェリペ二世
の結婚が決まり、6月22日に挙式された（柴田・樺山・福
井 1996:82-83, 山田 2014:26）。つまり、第8巻9番は長年
の宿敵だった両者が手を結び、イタリア諸邦も協力して、
ハンガリーや近東を支配していたオスマン帝国に対決するこ
とを示しているように読める²²⁾。

そして、ノストラダムスはその主導権を握る者として、
まだ40歳になったばかりのアンリ二世に期待をかけ、第二
序文で「勝利と至福」を祈ったのではないだろうか。とこ
ろが、献辞を書き上げた3日後の馬上槍試合でアンリ二世
が負傷し、7月10日に歿してしまった。この報に接したノ
ストラダムスは、さすがにその献辞のまま刊行するわけにも
いかず、とりあえず作業を中断した。しかし、次の王フラ
ンソワ二世は病弱で1560年12月に歿してしまい、王権は不
安定だった。また、ノストラダムス自身も、住んでいたサ
ロン＝ド＝プロヴァンスで起きた宗教対立のために、1561
年にはアヴィニオンへ2か月避難したことがあったほど
に、身の安全が脅かされていた（Huchon 2021: 194, 333）。
そして、翌年にユグノー戦争が始まったことで、さらに先
行きが不透明になった。このように自身の身辺も、国内情
勢も安定しない状況だったせいで、完全版を仕上げるこ
とができないままになってしまったのではないだろうか。

¹⁹⁾ ハンガリーに隣接する地名としては、スロバキアの首都ブラチスラヴァも第9巻で1度だけ登場している。

²⁰⁾ 1791Ga以降のいくつかの版では、4行目が「*Devant Bonieu viendra la guerre esteindre.*」となっている。1791Gaは独特の副題と異文が
1772Doと似通っているため、その版から派生したことはほぼ疑いないが、1772Doには上記のような異文はない。ゆえに、その異文は
1791Gaによる捏造と見なして差し支えなく、正統性は認められない。

²¹⁾ LarmeeはL'arméeの、PalerneはPalermeの、danconeはd'Anconeの、それぞれ誤記ないし表記揺れ。

²²⁾ この詩の読み方は、Clébert 2003やLemesurier 2010は我々に近いが、Sieburth 2012は前半を「サヴォーナで鷲と雄鶏が〔衝突する〕間、
レヴァントの海とハンガリーが同盟するだろう」のように言葉を補って読んでいる。

そうして出版に至らなかった草稿を、何者かがノストラダムスの死後に再編集し、第二序文の日付についても、不謹慎さが少しは薄れるようにと、1年早める形で改竄したのではないかと考えられる²³⁾。従来の議論では、第二序文の真筆性を疑う場合でも、奥付にはほとんど疑いが向けられず、「1558年版があったのか、なかったのか」という観点で議論されがちだったが、そもそも1558年を前提にすること自体が問い直されてもよいのではないだろうか。

我々は昨年、ノストラダムスの年代観がまだ十分に研究されておらず、その考察を深めることは、ノストラダムスの未来観を明らかにする上でも、『予言集』の出版状況を推察する上でも意味があることを確認した（鈴木 2024）。地名についても同様に、ノストラダムスが同時代の世界をどのように認識していたのかを明らかにする上で有用なだけでなく、『予言集』の出版状況へ理解を深めることにも役立つものと思われる。

4. おわりに

本稿では、『予言集』に登場する地名を整理した。その結果、増補された時期ごとに地名に偏りがあることが明らかになった。特に第8巻以降には直近の国際情勢の影響が強く、イングランドやオスマン帝国の侵攻に対する警戒感が投影されているように思われる。

また、第7巻までに比べ、第8巻以降には読み方の確定していない地名が明らかに多く、生前には完成原稿として仕上げられていなかったことが疑われる。この問題は、第二部の完成時期の推定にも影響する。

本稿ではあくまでも概観にとどまったが、地名の問題もまた、ノストラダムスの年代観同様、さらに深めてゆく必要があるだろう。

文献

- [1] Robert BENAZRA, « Répertoire des lieux géographiques dans les "Centuries" de Nostradamus », *Cahiers Michel Nostradamus*, n° 4, Lyon, L'Association des Amis de Michel Nostradamus, 1986, p. 57-62.
- [2] Pierre BRIND'AMOUR, *Nostradamus Astrophile*, Paris, Éditions Klincksieck / Ottawa, Les Presses de l'Université d'Ottawa, 1993.
- [3] Pierre BRIND'AMOUR (éd.), NOSTRADAMUS, *Les Premières Centuries ou Prophéties (édition Macé Bonhomme de 1555)*, Genève, Librairie Droz S.A., 1996.
- [4] Anna CARLSTEDT, *La Poésie oraculaire de Nostradamus*, Stockholm, Stockholms universitet, 2005.
- [5] Jean-Paul CLÉBERT, *Prophéties de Nostradamus. Les Centuries*, Paris, Le Relié / Dervy, 2003.
- [6] Benjamin GARSTAD (ed.), *Apocalypse of Pseudo-Methodius. An Alexandrian World Chronicle*, Cambridge, Harvard University Press, 2012.
- [7] Balthazar GUYNAUD, *La Concordance des Prophéties de Nostradamus, avec l'histoire depuis Henri II jusqu'à Louis le Grand*, Paris, Jacques Morel, 1693.
- [8] Mireille HUCHON, *Nostradamus*, Paris, Éditions Gallimard, 2021.
- [9] Peter LEMESURIER, *Nostradamus: the Illustrated Prophecies*, Alresford, John Hunt Publishing, 2003.
- [10] Peter LEMESURIER, *Nostradamus, bibliomancer: the man, the myth, the truth*, Pompton Plains, New Page Books, 2010.
- [11] Chantal LIAROUTZOS, « Les Prophéties de Nostradamus : suivez la guide », *Réforme, Humanisme, Renaissance*, n° 23, 1986, p. 35-40.
- [12] Edgar LEONI, *Nostradamus: Life and Literature*, New York, Exposition Press, 1961.
- [13] Bruno PETEY-GIRARD (éd.), NOSTRADAMUS, *Prophéties*, Paris, GF Flammarion, 2003.
- [14] James RANDI, *The Mask of Nostradamus*, New York, Charles Scribner's Sons, 1990.
- [15] Richard SIEBURTH (ed.), NOSTRADAMUS, *The Prophecies*, New York, Penguin Books, 2012.
- [16] サンジャイ・スブラフマニヤム「テージョ河からガンジス河まで—16世紀ユーラシアにおける千年王国信仰の交錯」、中村玲生訳、『思想』第937号、2002年。
- [17] スタンリー・レーン・プール『バルバリア海賊盛衰記—イスラム対ヨーロッパ大海戦史』、前嶋信次訳、リポート、1981年。
- [18] ピエール・ブランダムール校訂、高田勇・伊藤進 編訳『ノストラダムス予言集』、岩波書店、1999年。
- [19] 織田武雄『地図の歴史 世界篇・日本篇』、講談社、2018年。
- [20] 柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦『世界歴史大系 フランス史2—16世紀—19世紀なかば—』、山川出版社、1996年。
- [21] 鈴木大輔「ノストラダムス『予言集』初期版本に関する文献学的諸問題の検討」『放送大学文化科学研究』第2巻、2023年、p. 227-236。（鈴木 2023a）
- [22] 鈴木大輔「ノストラダムス『予言集』1668年版の信頼性について —『予言集』第二部はどの版で読むべきか—」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第32号、2023年、p. 1-13。（鈴木 2023b）

²³⁾前倒しは1年が限界で、2年前倒しにはできない。第7巻までが最初に出版されたのは、1557年9月のことだったからである。第8巻以降に添える第二序文の日付を、第7巻までの刊行よりも遡らせるわけにはいかないだろう。

- [23] 鈴木大輔「『予言集』などに見られるノストラダムスの年代観について」、『放送大学文化科学研究』第3巻、2024年、p. 252 - 261.
- [24] 二宮敬「解説」、『フランスとアメリカ大陸2』、大航海時代叢書（第Ⅱ期）20、岩波書店、1987年、p. 643-687.
- [25] 宮本陽子「中世ヨーロッパにおける終末論的イスラム解釈の形成と発展」、『史学』第58巻3・4合併号、三田史学会、1989年、p. 1-27.
- [26] 桃井治郎『海賊の世界史 古代ギリシアから大航海時代、現代ソマリアまで』、中央公論新社、2017年。
- [27] 山田慎人「フランス宗教戦争の勃発」、『武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編』第61巻、2014年、p. 23-31.